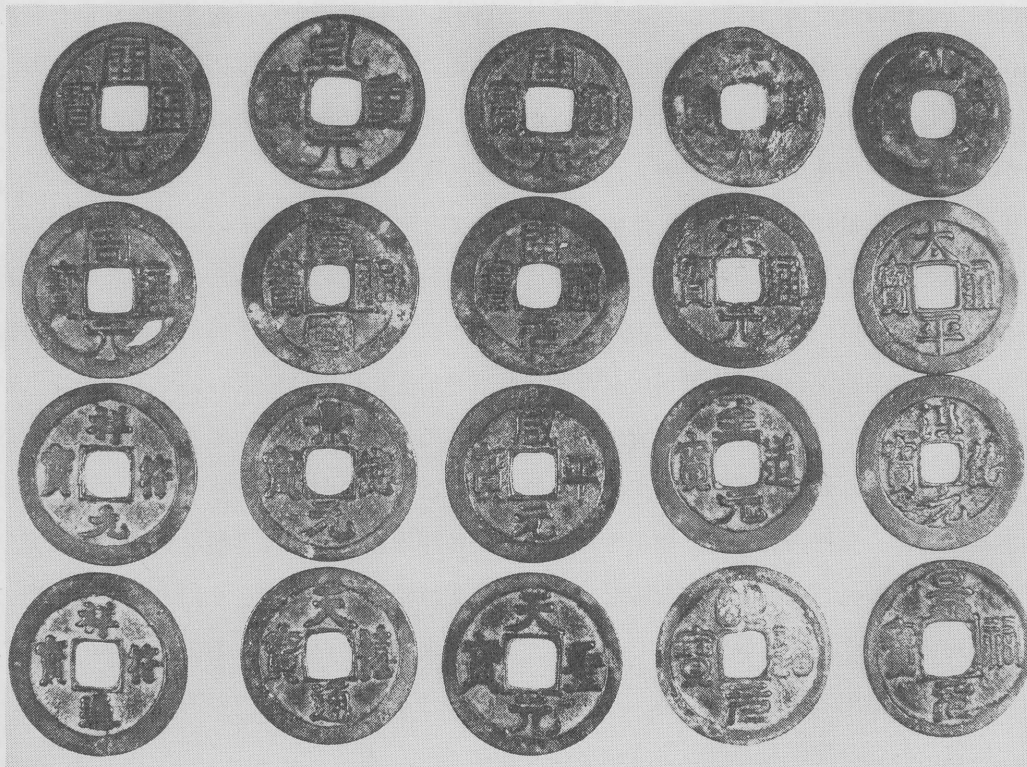


西宮市立郷土資料館ニュース 第13号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662 電話0798-33-1298



西宮市石在町出土銅銭

目次 CONTENTS

特別展「銅銭の考古学」(西川卓志) … 2

甲子園口遺跡出土の須恵器と土師器 (合田茂伸) … 4

寄贈資料一覧… 8

特別展「銅銭の考古学」 7月31日(土)→9月5日(日)

西川卓志(当館学芸員)

昭和49年、西宮市では2箇所から、あいついで中世期の大量出土銭が検出された。1箇所は西宮市山口町下山口に所在する公智神社(式内社)の拝殿下から、他は、西宮市石在町に属する国道43号線歩道下から出土したものである。両者ともに工事に伴う不時発見のため、出土した時の状態については不明な点が多い。その後、出土枚数の確認のため分類整理が実施され、関連諸手続きを終えた後、西宮市の所有となった。

1地点から大量に出土する中世期の銭貨について、考古学では若干の優れた業績があるものの、その資料としての特殊性が災いしてか、資料の集積に較べると積極的な研究の対象としてきたとはいいがたい。その理由は、まず不時発見の場合が多いために、大量の銭貨の詳細な埋納状況・周辺の遺構の存否とそれら遺構との位置関係について不分明な点が多いこと、さらに、回収された銭貨が埋納時のすべてであるかどうかについて疑問が残る点などにある。これらの原因が出土銭貨の研究と考古学との関わりを遅延させてきた原因である。近年、発掘調査により検出された資料が暫時増加し、考古学的な資料批判に充分耐える資料が散見されるようになった。また、歴史時代の考古学、とくに中世・近世期の都市遺跡にたいする考古学的な関心の増大と調査の進展に伴い、多くの出土遺物のなかにおいても、経済史との関わりで多くの成果が期待できる大量出土銭への関心がたかまり、新たに包括的な研究がなされるようになってきた。

このようななかであって、本市では、その後活用されることなく収蔵されていたこの上記2遺跡の資料について分類整理を実施することとした。調査にあたっては、兵庫埋蔵銭調査会(代表 永井久美男)に分類整理をお願いした。これらの成果は本年度分類整理報告書として刊行される。本館では、この成果にくわえ近隣各市で確認されている同様の資料を借用し、従来注目されることが少なかった中世期の銭貨について、特別展示を企画した。展示を企画するにあたっては、中世期大量出土銭のそれぞれの特徴や実態を示すとともに、本来中国銭であるそれら銭貨を材料に、中国大陸で発行された銅銭について一般的な解説を行う計画としている。展示を予定している資料は、本市2遺跡に加えて、

1、兵庫県宍粟郡安富町塩野出土銭

2、兵庫県宍粟郡山崎町岸田出土銭

- 3、兵庫県加古川市加古川町鶴林寺公園出土銭 4、兵庫県三田市西末南台遺跡出土銭
 5、兵庫県宝塚市西谷堂坂遺跡出土銭 6、兵庫県神戸市須磨区敦盛塚出土銭
 7、大阪府池田市吉田町出土銭 8、大阪府堺市堺環濠都市遺跡出土銭貨鑄型
 9、京都府京都市左京八条三坊七町跡出土銭貨鑄型

の各遺跡である。

近年、中世期の都市遺跡から銅銭の鑄型が検出され始めた。近畿地方では、堺市の「堺環濠都市遺跡」と京都市の「平安京左京八条三坊七町跡」から出土した例がある。鑄型のみに限らず鑄造関係資料を多数検出した遺跡としては、堺環濠都市遺跡が他を圧倒している。今回の展示では、堺市と京都市から出土した銅銭の鑄型資料を借用し展示する。従来、「撰銭令」との関係から議論の対象となった私鑄銭ではあったが、その鑄造の実態についてはまったくといっていいほど不明であった。その技術の一端を、今回の展示資料でかいま見ることができる。

また、このたび本館が所蔵する中国銭の資料もあわせて展示する。この資料は、平成2年4月に石倉幸男氏(故人 西宮市南甲子園在住)から寄贈をうけた資料である。石倉氏は“観銭”の趣味に没頭され、各地の研究会や展示会に参加されていた。とくに、中国明銭「洪武通寶」に注目されてからは、その収集に奔走され、「洪武通寶」の大コレクションを作られた。その数は6400点をこえ、その種類の多さは中国明代の鑄銭事業の様子を偲ばせる。また、いわゆる「加治木洪武」や「筑前洪武」といった日本で鑄造された私鑄銭も収集されている。これらの資料は中国銭の実態を物語る好資料であるとともに、日本出土の銭貨を吟味するチャートとしても有用である。中国渡来銭に全面的にたよった日本の中世期貨幣経済のなかにあっても、「洪武通寶」と「永楽通寶」は格別の銭貨であったことを考えると、伝存資料であるとはいえこの「洪武通寶」の分析は、出土する銭貨と比較対照できる実物資料として、その存在意義は大きいものと考えられる。このたび、出土銭と同様にそれらの分類整理が完了したのでここに展示し、寄贈していただいた故石倉幸男氏に対し、お礼としたい。

なお、展示にあたっては本年刊行予定である『石在町出土銭と公智神社出土銭』（編集執筆 永井久美男 兵庫埋蔵銭調査会 1993年度出版予定）の記述内容を参考にさせていただいた。また、本館企画の特別展に資料の出品を快諾いただいた関係各機関に感謝申し上げますとともに、大量の銅銭に長期間にわたって取り組んでいただいた兵庫埋蔵銭調査会の会員の皆さまに深謝いたします。

甲子園口遺跡出土の須恵器と土師器

合田茂伸 (当館学芸員)

甲子園口遺跡出土の遺物のうち、西宮市甲子園口3丁目4番21号(図2-1)より出土した弥生土器および土師器は、本誌第4号にすでに紹介している⁽¹⁾。今回は同時に出土した須恵器、および、1987年に同3丁目4番12号(図2-2)の発掘調査において出土した須恵器、土師器をあわせて報告する。

図示する遺物は、須恵器55点、土師器6点である(図3~5)。これらのうち1987年調査出土遺物は4、11、37、42、43、44、52、56~60、61の13点で、1978年出土遺物はこれ以外の48点である。ここでは、紙面の都合から概略を述べることにする。

須恵器には蓋杯、高杯、甕、筒形器台、甕、脚台がある。須恵器は小破片を多く含むが、摩滅はみられない。須恵器の胎土、色調にはいくつかの種類を見出すことができる。8、11、21、28、43、45、47、55などは、明るい灰色、青灰色または暗紫色で、非常に精選された胎土を用いて堅緻に焼成されている。また、白灰色できめの細かい胎土を用いて堅緻に焼成されているものに、4、36、41がある。これにたいし、灰色を呈し、粗い胎土中に2~3mmの砂粒を多く含むものに、16、19ほか、多くの個体がある。須恵器は杯蓋に、天井部がたいらで、天井部端部に鈍い突帯状の段を有する1から、天井部がまるくなり、突帯状の段が完全に消失する9まで、いくつかの型式があり、杯身もこれに対応する。ほぼMT15型式からTK43型式に該当するであろう。他の器種の型式もこれを逸脱するものはみられない。これら甲子園口遺跡出土の須恵器には6世紀前半期の年代を与えることができる。

土師器には甕形土器および把手がある。4、11などと共伴した土師器は甕形土器および、把手である。56は甕形土器の口縁部、57、58は鏝である。59、60とともに同一個体をなすものと思われる。61は別個体、黄橙色の把手である。

これらの遺物から、古墳時代の甲子園口遺跡は6世紀前半の短期間に営まれた遺跡であることがわかる。

註(1)合田茂伸「甲子園口遺跡出土の弥生土器」『西宮市立郷土資料館ニュース』第4号 1989年

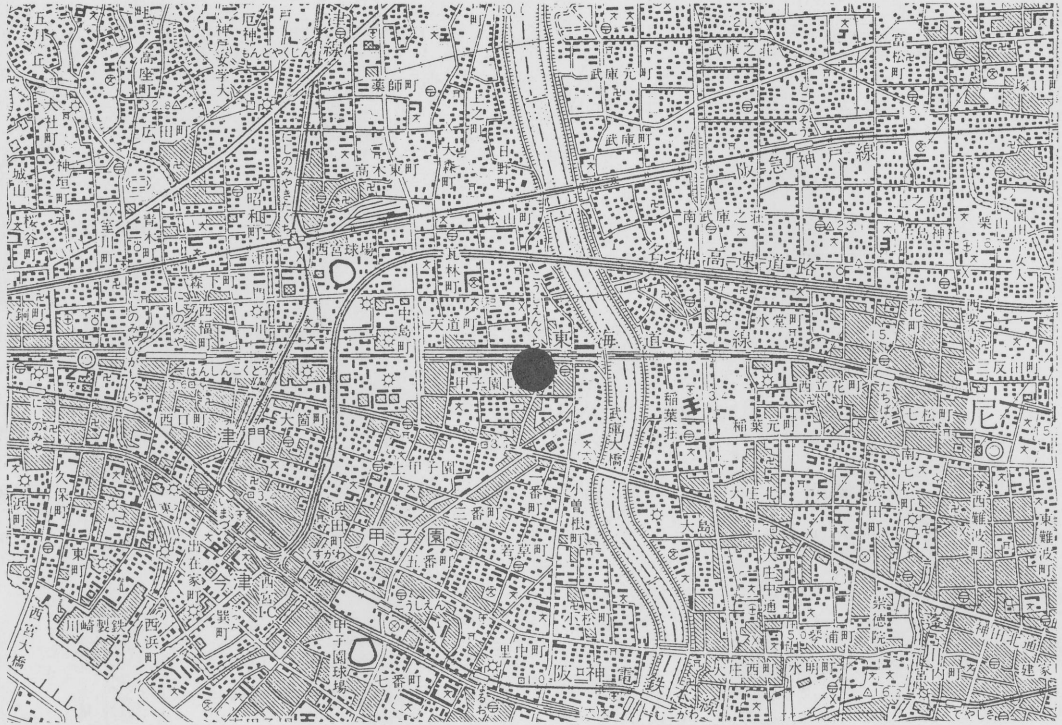


図1 遺跡位置図 (1 : 50000) (国土地理院「大阪西北部」平成4年)

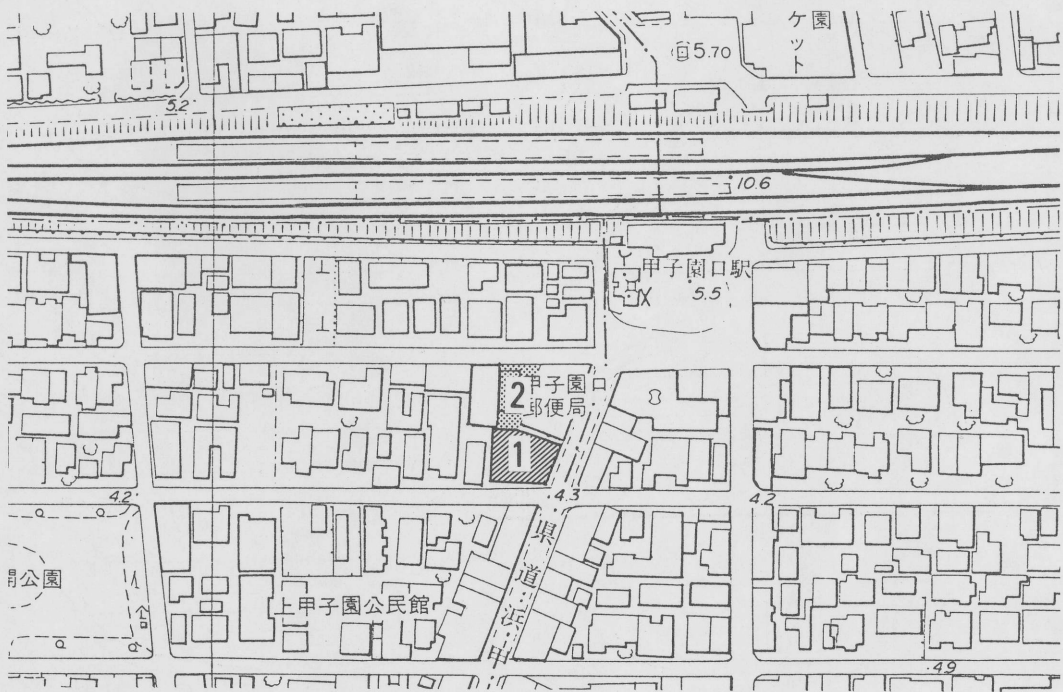


図2 遺跡位置図 (1 : 2500) (西宮市役所「甲子園口」昭和54年)

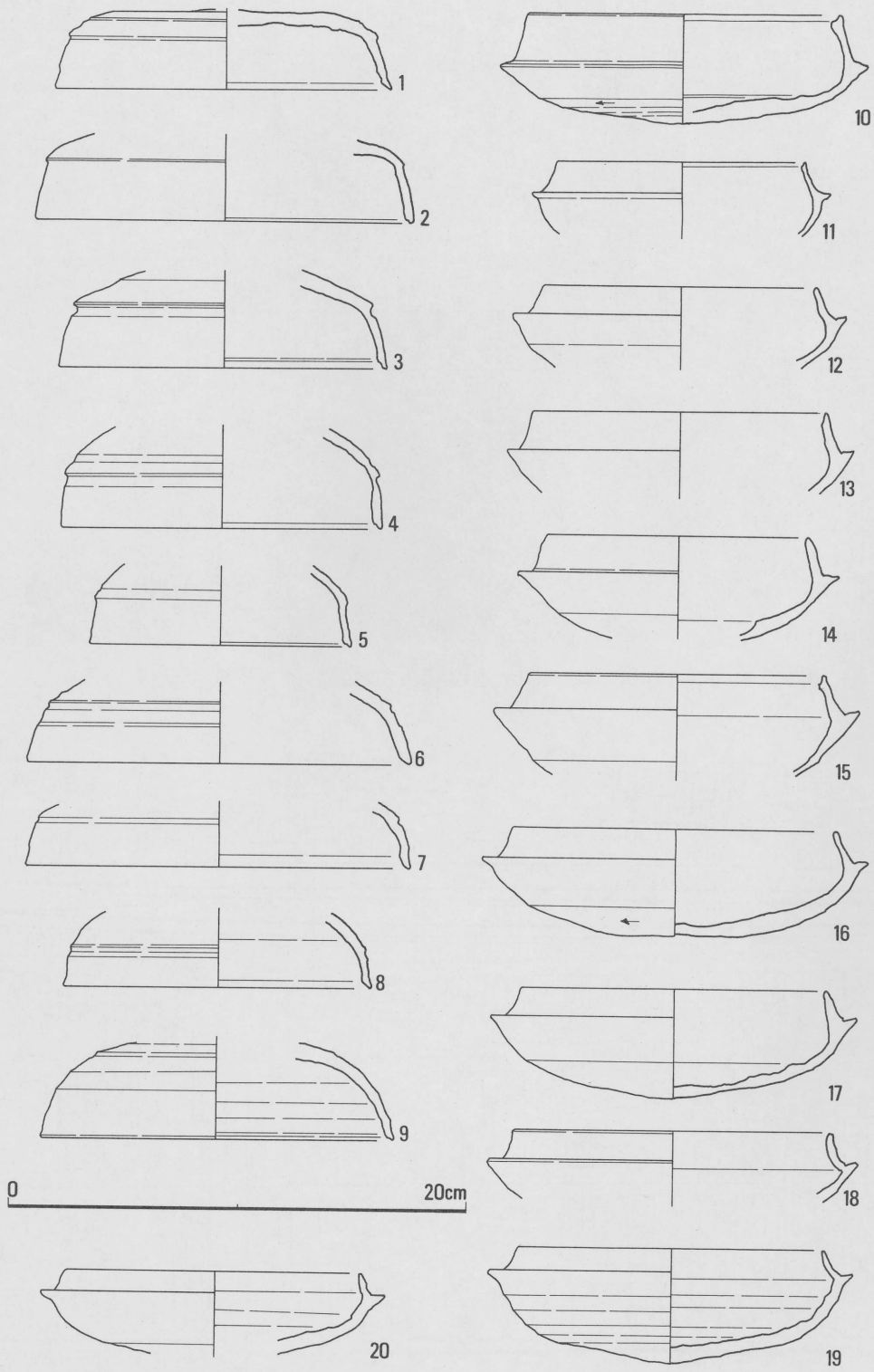


図3 甲子園口遺跡出土須恵器実測図 (1) (1 : 3)

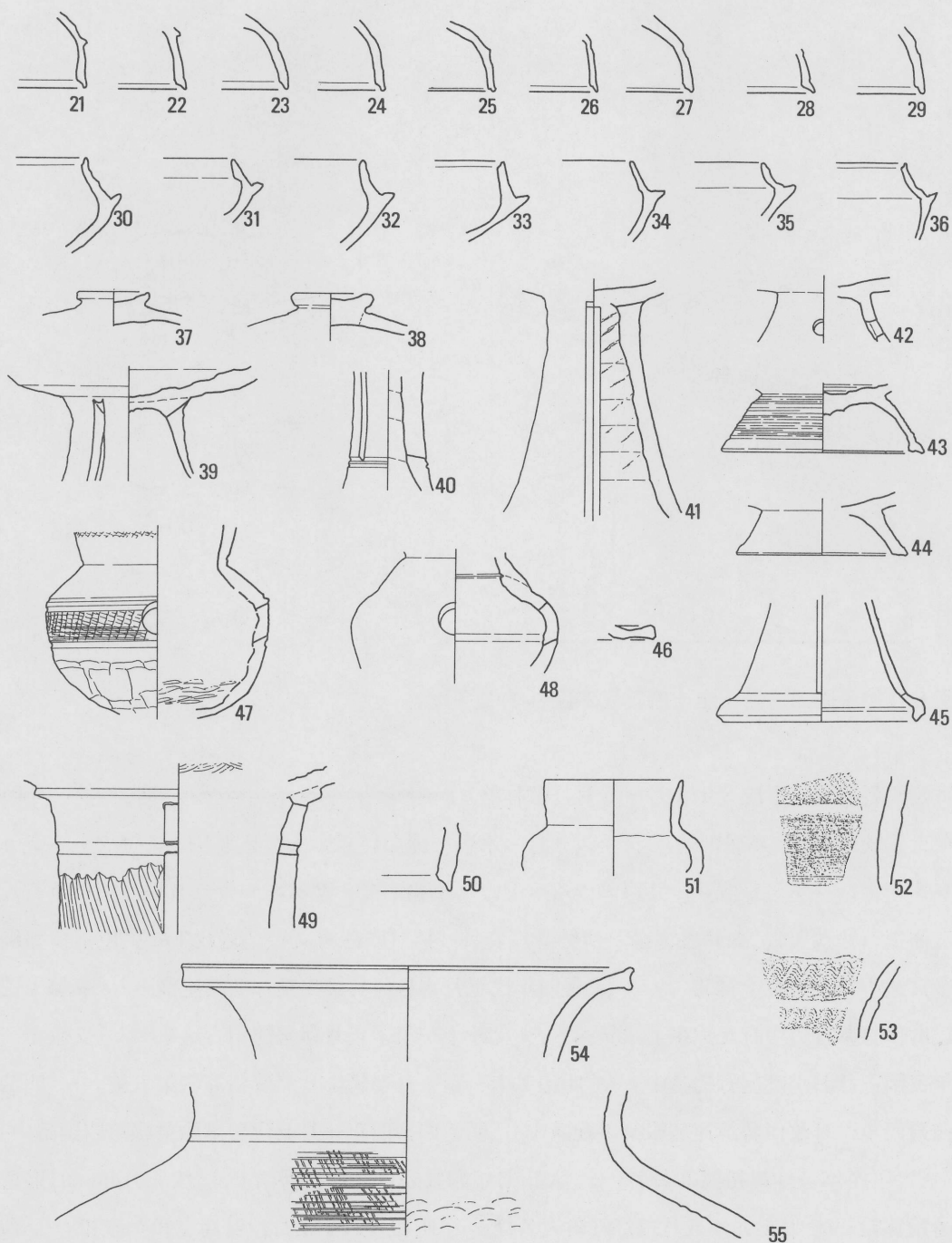


图4 甲子園口遺跡出土須恵器実測図(2)(1:3)

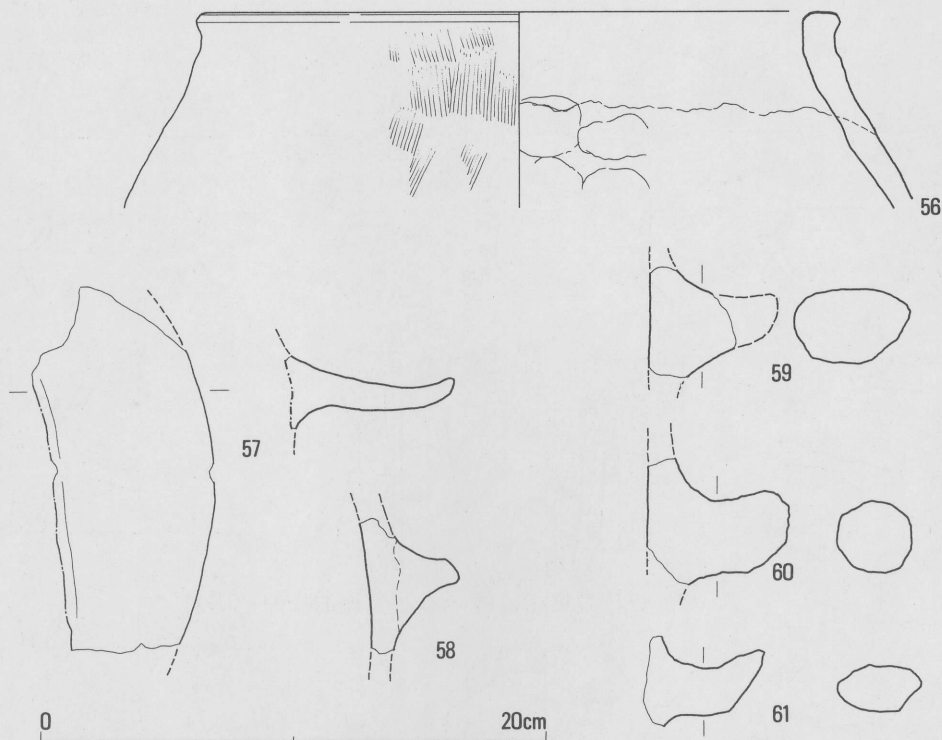


図5 甲子園口遺跡出土土師器実測図（1：3）

寄贈資料一覧（平成5年1月～5月、敬称略）

燈火管制用電球（鳥居則通）、タンス2点・水車・縄ないき・モグラトリ・ヨコツチ・ジョレン・スコップ・草取り・井戸のつるべ上げ・車輪・モミタタキ・カラスキ（柴田重芳）、洗濯盥（辻茂美）、森具盛徳講（伊勢講）資料一括〔盛徳講文書「寛政十二庚申年伊勢御参宮道中日記四月十日発」・「天保四年巳正月吉日伊勢講田地作間勘定調」・「享保十乙巳曆伊勢参宮道中日記弥生上六発端」・「文政十一年子正月伊勢講申合之帳」・「文政十三年寅閏三月おかげ施行控講中」・「明治二十一年一月初講より諸費精算帳第五號」・「明治四拾四年一月改伊勢講連名帳第參號講中」・「明治四拾四年一月改伊勢講順番帳第四號講中」・「大正四年一月起初穂寄人名」・「大正七年四月委員名簿伊勢講」・「大正八年一月盛徳講精算帳」・「大正九年五月提灯寄附人名控」・「昭和廿八年正月伊勢講金預ケ置扣」・「伊勢講積銀取調講中」・講道具〕（森具盛徳講）

ご寄贈ありがとうございました。

西宮市立郷土資料館ニュース第13号 1993年（平成5年）7月1日発行